



ブータンでの体育の授業の様子。ブータンの学校生活は何か日本と違うのか。子どもたちの好奇心が集まるポイントだ



世界にはどんな国があるのかな？ クラスメートと共に考える



工業団地に多くの外国人が住む愛川町。広域避難場所の看板にも、スペイン語やポルトガル語が書かれている

「自分たちの生活や習慣と比べて考えたときに児童たちは大きく反応してくれます」と、来山先生は言う。他にも、ブータンの体育の授業の様子を写真で

一方で、最近では工業団地で働く外国人が増え、町内の小学校6校の中には、外国人児童の数が3割を超えているところもあるという。愛川町立高峰小学校では外国籍の児童は少ないが、来山先生が担任を務める4年生のクラスにも海外とつながりを持つ児童が何人かいる。とはいえ、多くの子どもにとって、世界はまだまだ縁遠い場所だ。

2年間の滞在中、同じ学校の先生たちをはじめ、地元の人たちの親切に助けられたことが多かったという来山先生。「お弁当を作ってもらったり、けがをしたときは病院まで運んでもらったり、授業に必要なものを準備してもらったこともありました。そうした経験を通して、私自身もブータンの人たちに感謝の気持ちを教えてもらったと思います」と言う。

「教師として、若いうちに一度海外に行ってみることは、その国を経験した目線で日本を見直す貴重な機会だと思います。教員の身分を保持したまま青年海外協力隊に参加できる現職教員特別参加制度など、さまざまなチャンスを生かして、旅行ではなく仕事として海外で暮らしてみることは、とてもお勧めです」と来山先生は強調する。



授業が終わっても、子どもたちの質問は続く。世界に目を向けるきっかけを作りたいというのが、来山先生の考えだ



身の回りから開ける 世界への扉

青年海外協力隊として、ブータンで体育を教えた経験を持つ、神奈川県愛川町立高峰小学校の来山輝昌先生。子どもたちが世界に目を向けるきっかけを作るため、工夫を凝らした授業を行っている。

世界とつながる 教室

「アフリカって国だっけ」「じゃあ、アメリカはどう」「カイトって国、あったっけ」「アイスランドとアイルランドはどちらが国かな」
知っている国を聞かれた子どもたちが、口々に名前を挙げる。そのほとんどは先進国や、サッカーなどスポーツで名前が知られている国だ。行ってみたい国はと問われると「世界一の都会だからアメリカに行きたい」「イタリアでピザを食べてみたい」「広いロシアを探検したい」「エジプトのピラミッドを見に行きたい」——具体的なイメージを挙げて語る子どもが多い。

自分たちの生活との違いが 世界への最初の扉

ブータンのあいさつや風景、生活など、親しみやすいところから話を広げる来山先生



新しい視点で 日本を見直す機会に

「教師として、若いうちに一度海外に行ってみることは、その国を経験した目線で日本を見直す貴重な機会だと思います。教員の身分を保持したまま青年海外協力隊に参加できる現職教員特別参加制度など、さまざまなチャンスを生かして、旅行ではなく仕事として海外で暮らしてみることは、とてもお勧めです」と来山先生は強調する。

授業の後、子どもたちに感想を聞くと、「ブータンに行って一緒に遊んでみたい！」と元気のいい答えが返ってきた。子どもたちの世界への扉は、確かに開かれているようだ。